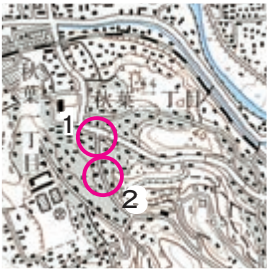

図17　遺跡の位置　1,秋葉遺跡　2,秋葉ブドウ園遺跡　2万5000分1地形図「新津」

秋葉遺跡と秋葉ブドウ園遺跡　秋葉区秋葉一丁目・秋葉三丁目

両遺跡は、新津丘陵の北端に近い台地状の尾根に立地する縄文時代の集落跡である。秋葉一丁目のバス停留所から秋葉公園へ通じる道路の両側一帯が遺跡であるが、現在はほとんどが住宅になっている。標高は二〇メートルほどである。

昭和六十三（一九八八）年まで、秋葉遺跡から採集された土器は一〇点に満たなかった。いずれも後期初頭の土器片であった。石斧二点が採集されたという記録もあったが、石斧は所在不明となっていた。また、秋葉公園寄りに隣接している秋葉ブドウ園遺跡では、中期前葉の土器片七点だけが採集されていた。

平成十（一九九八）年、宅地造成に伴い新津市教育委員会が秋葉遺跡を六二平方メートル発掘調査した。この調査では、土器片や石器・剥片が高さ一〇センチメートルほどの平箱で一一箱ほど出土し、大きく中期と後期の二時期の遺跡と分かった。翌十一年には個人住宅の建設に伴い、新津市教育委員会が秋葉遺跡の別地点一〇〇平方メートルを発掘調査し、二棟以上の竪穴住居の痕跡と土坑数基を検出した。土器捨て場であったと見られる斜面からは大量の土器片が出土し、調査で得られた遺物量は平箱一二〇箱に及んだ。また、この調査地では中期後半の土器の量が、中期初頭～中葉と後期初頭～前葉の土器より多いことが分かった。図一九は、こ

図19　王冠形土器

図18　秋葉遺跡　秋葉公園へ続く道路

の調査で出土した中期中葉の土器の口縁部片を復元したものである。中越地方を中心に盛行した火炎土器様式のうち、王冠形土器という形式で、口縁の突起が扇状に立ち上がっている。

平成十四年には、下水道管埋設工事に伴い、新津市教育委員会が立会調査をしたが、その場所では遺物が出土しなかった。

市町村合併後の平成十八年には、下水道管埋設工事に伴い、新潟市教育委員会が秋葉遺跡・秋葉ブドウ園遺跡を含めた立会調査を行った。この調査では、両遺跡とも中期・後期の遺物が多く出土した。また、出土範囲は両遺跡にまたがっており、遺跡の途切れ目はなかった。このことから、両遺跡を合わせ、縄文時代中期・後期の一つの大きな集落跡であった可能性が高まった。

市域には、早くからの都市化や農地整備のため、両遺跡のように範囲や時期・残存状態が明確でない遺跡が多くある。こうした遺跡では、建物の建て替えや下水道管の埋設工事などの機会に、少しずつ調査を行い、その結果の積み重ねで遺跡の内容を明らかにするしかない。両遺跡は、そうした調査が行われている遺跡である。